

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07285

研究課題名(和文)英国ロンドン大学博物館の事例に見る博物館教育における実物教授の教育機能

研究課題名(英文)A study of Object-based learning program from the case of UCL Museums

研究代表者

山本 桃子(YAMAMOTO, MOMOKO)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：20779110

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：UCL学内の学術資料展示について現地調査と教育担当者へのヒアリングを行った。現地調査では、学内オープンスペースThe Octagonにて実施されていた「Cabinets of Consequence」の展示を中心に、展示物と展示キャプションの内容を分析した。UCL内の3つの大学博物館、すなわち自然史、エジプト考古学、美術史を専門とする3館(以下常設館)はワークショップを中心とした標本・作品に触れる教育プログラムを行っていた。一方The Octagonでは限られた展示スペースのなかで、文理混合の学術分野を横断した展示で大学の研究成果を広く学内外に提示する役割を果たしていた。

研究成果の概要(英文)：The field work in four university museums in UCL and interview with museum were examined. In the field work, exhibition contents and captions were analyzed. The Octagon is the open space in main hall of UCL, which had a temporary exhibition "Cabinets of Consequence", and three different concepted museums in the UCL, they are Natural History, Egyptian Archeology, and Art History. Three museums are conducting object-based education programs in the regularly workshops. On the other hand, The Octagon played a role in presenting the results of the faculties research widely by crosses academic field among limited exhibition space. Though the objects and display method are different, in terms of the education aim is in common.

研究分野：博物館教育

キーワード：大学博物館 社会教育 実物教授

1. 研究開始当初の背景

(1) 博物館教育において、実物教授は歴史的に見て非常に重要な教育方法である。実物教授は、観察などの学習者の直接体験を重要視する教育方法で、「日本博物館学の父」と称される榎橋源太郎が通俗教育のために提唱した。大正初期に東京教育博物館の初代館長を務めた榎橋は、博物館教育の意義を、学校教育と比較して「学習者がモノから直接学ぶ点」に見出した。榎橋の教育論は、博物館教育の基礎として現在でも小笠原善康をはじめとする研究者に継承されている。

しかし近年の博物館教育の分野では、実物教授を対象とした研究は少ない。その理由は、ICTの進歩によって博物館資料のデジタル・アーカイブ化が実現したためである。情報学の視点から ICT の技術を利用した博物館教育研究が盛んになる一方で、博物館における実物教授の教育的意義を指摘した研究はほとんどなされていない。実物教授に内包されるハンズ・オン（展示物に触れて学ぶ体験学習）の研究は一部なされているものの、解説員を伴った観察やワークショップなど、実物教授を包括的に論じた先行研究はない。

(2) 申請者は、修士論文において、大学博物館でのボランティアの展示解説を対象に、実物教授の果たす教育機能を指摘した。

大学博物館に着目した理由は、数ある博物館の中でも特に社会から教育機能を強く期待されているためである。国内の大学博物館は2000年前後に急増し、現在約200の大学博物館がある。増加の背景には、大学博物館を「開かれた大学」の実現に向けた「社会と大学をつなぐ窓口」とするべく、大学側の「大学の社会教育機能の拡充」の意図があった。これら大学博物館が有する教育機能の重要性から、英国の総合大学博物館の教育活動の分析を行い、その対象と目的、および教育に活用されている資料の種類について検証した。

また、イギリスの大学博物館を対象にした理由としては、英国の博物館設置基準に当たる「Registration Scheme」では、「コレクションの保護と維持」に代わり「教育」が中心に据えられるなど、コレクションの「保護」よりも「教育」を明確に重要視しているためである。このような例は、オランダで一部導入されているものの世界的にも数少なく、国立博物館の多くが入場無料など、社会的に博物館が公共の場であり、教育の場として機能しているためである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、博物館教育における包括的な実物教授（Object-Based Learning、以下 OBL）の機能を、ロンドン大学（UCL）の大学博物館の事例から明らかにすることである。具体的には、博物館が実物教授を通して「誰に」「何を」「どのように」伝達する

のかを解明し、実物教授が果たす複合的な教育機能を検証した。

博物館における実物教授は、展示資料の観察、ハンズ・オン（手に取れる）展示、ワークショップの3種類に大別される。これらを組み合わせた OBL プログラムを行っている UCL 大学博物館を対象に、学びへのアプローチの視点から、実物教授の教育機能を捉えた。

3. 研究の方法

本研究は英国のロンドン大学博物館の教育プログラムに焦点を当てた研究のため、英国での現地調査および資料収集を実施した。1年目は主に資料収集とフィールドワークを行い、大英図書館や英国の博物館をフィールドに実物教授（OBL）に関する先行研究文献等の収集と批判的検討を行った。また、資料収集と並行してロンドン大学博物館の教育担当者へのヒアリングを行った。

2年目はイギリス北部やアイルランドのダブリンにある他の大学博物館の活動とロンドン大学の取り組みを比較し、その教育的特性を検討した。

ロンドン大学内展示施設 ペトリーエジプト考古学博物館 (The Petrie Museum of Egyptian Archaeology) グラント自然史博物館 (Grant Museum of Zoology) ロンドン大学美術館 (UCL Art Museum) オクタゴン（開放型展示スペース） (The Octagon)

4. 研究成果

ロンドン大学全体での所蔵資料数は約3億点にものぼり、それらが学内の4つの展示施設（上記参照）に展示、保管されていた。また、すべての展示スペースにおいて、Object-based learning の理念に基づいて、学生、児童、生徒など対象者の年齢に応じたプログラムが多数設置されていた。

グラント自然史博物館やペトリーエジプト考古学博物館では、学生の実習時間と一般向けの開館時間をずらすなど、学生にとっての学習・実習の場と、一般利用者の学習の場を区切るなど、学習の対象者と目的に合わせた施設運営を行っていた。

また、学生の授業内実習の際には、動物の骨格標本や剥製を実際に触り観察する手法、すなわちより観察の精度の高いハンズ・オンによって学生たちが主体的かつ能動的に学習に取り組んでいた。教員はワークシートを作成し、標本から読み取れる生き物の体組織に関する質問やスケッチ欄など、学生の積極的な観察を促す工夫をしながら意識的なファシリテートを行っていた。

美術コレクションの中には長崎の被爆者を描いたスケッチもあり、それらを「Cabinets of Consequence（成果のキャビ

ネット)」というテーマで展示し、既存の学問枠組みに固執せずに理系から文系まで過去の研究成果を提示する展示が行われていた。

ロンドン大学で実施されていた教育プログラムの詳細については、今後論文で発表する予定である。

特筆すべきは、教育を含め、大学博物館全体で「実験的」な試みが盛んに行われている点であった。将来の博物館の青写真を描くべく、館内やコレクションを利用した展示、公演を行うなど、既存の博物館の内包する境界を積極的に破壊・再構築する試みが行われていた。

研究を進めるにあたり、大学博物館の所蔵する学術標本が実に多様で多国籍であることから、社会教育分野における多文化共生の理念を学ぶための教育素材として有用である点に着目した。そのため、イギリス国内やアイルランドの大学博物館にも研究対象を拡大し、多文化教育や歴史教育の機会をどのように提供しているのかを調査した。

調査を行ったのは、以下の大学博物館である。これらの大学を選んだ理由は、歴史およびコレクションの質の点においてスコットランド、アイルランド各地域を代表する博物館であるためである。

・イギリス、グラスゴー大学 ハンタリアン博物館 (The University of Glasgow, Hunterian Museum)

・アイルランド、トリニティー・カレッジ大学博物館 (Trinity College Dublin, The University of Dublin, The Book of Kells Exhibition)

ハンタリアン博物館は、18世紀のウィリアム・ハンター (Dr William Hunter) のコレクションを元に19世紀初頭に開館した博物館で、スコットランド最古の博物館の一つである。グラスゴー出身のハンターは解剖学の教師として活躍し、解剖学および生物学の膨大なコレクションを築いた。スコットランドの自然史とハンター博士ゆかりの医学機器を中心としたコレクションは、郷土史の役割も一部果たすなど地域に密着した展示を実施していた。

ダブリンのトリニティー・カレッジ大学博物館では、アイルランドで最も有名な本である「ケルズの書 (The Book of Kells)」が展示されていた。常設展示されているものはレプリカであるものの、アイルランドの国宝であり、美術的な価値も高いケルズの書は、アイルランドの地域文化を代表する資料である。

これらのスコットランド、アイルランドの大学博物館では、大学の研究蓄積としての学術資料の展示はもちろん、地域に根ざした文化財や自然史標本が多数コレクションされていた。UCLの大学博物館においては、ロンドン大学美術館内にロンドン市内の風景を

描いた素描などが所蔵されているなど地域性のある資料はあるものの、ハンタリアン博物館やトリニティー・カレッジ博物館とはやや性質が異なっていた。これらの地域性を内在した資料展示が博物館の教育の大部分を占めている点が、UCL大学博物館との相違点であることが示唆された。

このイギリスおよびアイルランドにおける大学博物館と地域性の課題については、今後の検討課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0件)

[学会発表](計 2件)

(国際学会ポスター発表)

Momoko YAMAMOTO "Museum for Place and History: Possibility of Peace Education with Voices of Perpetrators and Others." ,2017.04, INMP(International Network of Museums for Peace),9th conference at Belfast, North Ireland .

(国際学会発表)

Momoko YAMAMOTO "Peace study in university museum: Focus on observation and awareness of children",2017.08, APPRA(Asia Pacific Peace Research Association), 2017 conference at Universiti Sains Malaysia, Penang, Malaysia.

[図書](計 0件)

なし

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

なし

取得状況(計 0件)

なし

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

山本 桃子 (MOMOKO Yamamoto)

早稲田大学教育総合研究所助手

研究者番号: 20779110

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし